

第十三章 トンネル効果

ソシアとウクライナー共和国の攻防が激しさを増す。ソシア軍あるいはウクライナー軍によって道路は寸断され橋が落とされる。それぞれの戦車や歩兵の移動を阻止するためだ。しかし、戦火を逃れようとするウクライナー国民、特に子ども、女性、老人、病人はソシア軍の包囲網を超えることはできない。

ところが鉄道はダイヤどおりではないが機能している。駅にたどり着いて列車に乗れば何とか安全な地域までは行ける。ウクライナー軍が駅や列車や線路や鉄橋を攻撃することはないが、ソシア軍はお構いなしだ。ところが駅など鉄道関連施設はすべて無事だった。

遅まきながらイリがそのことに気付く。

「私は特急イリ・ライナーで支障なくウクライナー国内を移動できる。なぜかしら」
榊と加藤は初めて乗車したので首を傾げるだけだった。そこに長老が現れる。

「ゴボン」

「長老じゃないか！ 生きていたのか」

榊が歓声を上げると加藤が手を差し出す。握手が済むと長老がおもむろに口を開く。

「イリ様。すべてではないのじゃが、ウクライナー国内の駅は攻撃されても完全に機能してお

る。鉄橋も。攻撃されても落ちることはないのじゃ」

「まさか」

イリは長老がぼけたのでは心配する。しかし、榊と加藤は真剣に長老を見つめる。そのとき大きな震動がする。外を見つめると戦闘機が上空を通過する。その映像が車内前方のスクリーンに転送される。

「ソシア空軍だ」

数機の戦闘機が疾走する特急イリ・ライナーを襲う。イリが乗車しているのを知ったのか二十発以上のミサイルを至近距離から発車する。先にこんな状況を把握していたら榊や加藤は容赦なく宇宙戦闘機か、宇宙戦艦で直接攻撃するかして即座にソシア軍戦闘機を撃墜したであろう。しかし、イリ・ライナーは何事なかったように麦畑の中を走っている。

「長老の言うように何らかの方法で特急イリ・ライナーを守っているとしても列車はレール上を走っている。それに架線から電力供給を受けている。枕木一本破壊されても脱線して動かないくなる」

加藤の分析に長老は黙っている。仕方ないので加藤は答えにならない答えを出す。

「レール、枕木、架線、信号機、鉄橋……鉄道設備そのものすべてがシールドしてされているとしか言い様がない」

榊が疑問を呈する。

「細長いバリアーで鉄道網が守られているとでも言うのか？」

加藤が目を閉じる。何かしきりに考えているようだ。窓からのどかな田園風景が見える。ユーロ・ライナーやウク・ライナーやイリ・ライナーが走る鉄路は日本の新幹線のようにすべて高架化されているわけではない。むしろ地上を走る区間の方が長い。それにトンネルが少ない。ふと加藤が目を開けるとつぶやく。

「トンネル効果……」

加藤が手を打つ。

「地下鉄のように地下を走っていればシールドしやすいが、何らかの方法で量子力学で言う『トンネル効果』で少なくともウクライナー国内の鉄路はすべてシールドされているのだろう」

慎重に物事を考え運ぶ加藤にしては珍しく雄弁になる。元原子力発電所の所長だった加藤の物理学に対する深い造詣が「トンネル効果」という理論を持ち出したのかもしれない。

「ノロが聞いたら喜ぶ理論かもしれないな」

榊が茶化す。すると急にイリの目が丸くなる。

「ノロがトンネルを造った？」

イリはウクライナー国内の鉄道網がソシア軍の攻撃を受けてもまったく被害がないことを再認識する。こんなことができるのはノロ以外にはいない。こう確信したが、ノロがまったくこの戦争どころか地球に興味を持っていない。間を置いてイリの言葉に反応した加藤が先ほどま

での勢いのある理論を補強するどころか逆に慎重になる。

「トンネル効果を応用できる者がいるとすればノロしかない。でもノロは両生類や爬虫類の研究以外まったく興味がない」

イリが頷く。榊は自分の専門外なので発言しない。

「ノロは太陽光を電磁波に変換して宇宙ステーションを打ち上げてどこでも二十四時間電気が使えるシステムを開発したわね」

「確かに。そうか、そのシステムを利用して……」

加藤が新たな説を構築しようとするが、すぐに諦める。いくら物理学に精通していると言っても網の目のような鉄道ネットワークをシールドするシステムを構築するなど想像すらできないからだった。

「さてノロじゃないとすると誰がトンネルを造ったんだ？」

誰も答えを持ち合わせない中、長老が割り込む。

「グレーデッドの残党……失礼な言い方じゃった。ノロについていかに地球に残ったグレーデッドの科学者たちでは？」